

鬼つ子「右横書き」とその時代 —縦書き専用だった日本語が縦書き・横書き両用となるまで—

屋名池誠
Yanaike Makoto

漢字・カタカナ・ひらがなといった独自の書字文化をもつ日本。本来、日本語は「縦書き」に適したものととして発展を遂げてきたが、江戸後期には「横書き」というまったく異質な書字文化に遭遇する。現在の「左横書き」が主流の時代となるまでに、反発と模倣、さまざまな試行錯誤があった事実、あまり知られていない。だが、そのユニークな遭遇史は、異質なものととの出会いを新たな創造につなげる文化的プロセスの良き見本として、現代にも役立たせるのではないだろうか。

やないけまこと
慶應義塾大学文学部教授。1957年、東京都生まれ。1985年、東京大学大学院博士課程中退。昭和女子大学専任講師、大阪女子大学専任講師、東京女子大学助教授、同教授を経て現職。専門は日本語学。おもな著書に『横書き登場——日本語表記の近代』（岩波新書）、共著に『上方ことばの今昔』（和泉書院）などがある。

近代以前の日本の 「二行一字の縦書き」表記

日本語を使うわれわれにとって、文字を縦書きにも横書きにもできることは、ごく当たり前のことにすぎない。しかし、縦書きする英語などというものが無い（縦長の看板などに見られる一見縦書きのように見えるものは、一行一字の横書きである）ことからわかるように、世界的にはこうした自由のきく言語はきわめて稀なのである。

実は日本語が縦書き・横書き両用になったのも、わずかここ百数十年のことにはすぎない。日本語は古来縦書き専用だったのだが、左から書いていく横書き（以下、「左横書き」とよぶ）を使う欧米の言語との出会いによって、横書きという新しい様式をもつに至ったのである（日本語同様に現在縦書き・横書きどちらもできる中国語や朝鮮語も、もともとは

縦書き専用で、近代の日本語の事例に触発されて横書きが始まったものである）。

こういって、「いや右から書いてゆく横書きなら昔からあったのでは」と思う人も多いのではなかろうか。欄間の扁額などによく見られる、図1のような書き方である。図1は江戸時代初期の禅僧沢庵の筆になるもので、右から「無一物」と書かれている。実はこれは横書きではなく、一行一字の縦書きなのである。紙の幅いっぱい大きな文字が書かれているので、縦書きの一行に一字しか入らず、左へ進むのは行が移ってゆくからなのである。字が小さく書かれて、縦方向にも二文字以上文字を入れる余裕があれば縦書きされることは、図1の左端の署名に見られる通りである。

こうした例が、横書きではなく、確かに「一行一字」の縦書きであることは次のような点からも知ることができる。図1のようなくずし字は、当

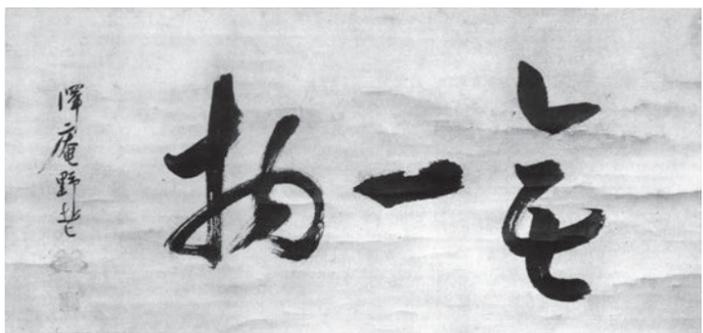


図2:『法華経宝塔曼荼羅図』
法華経の経文で塔を描いているが、縦の線は縦書きで書かれ、横の線は90度文字を倒して縦書きされている。所蔵/長栄山妙法寺(堺市博物館)

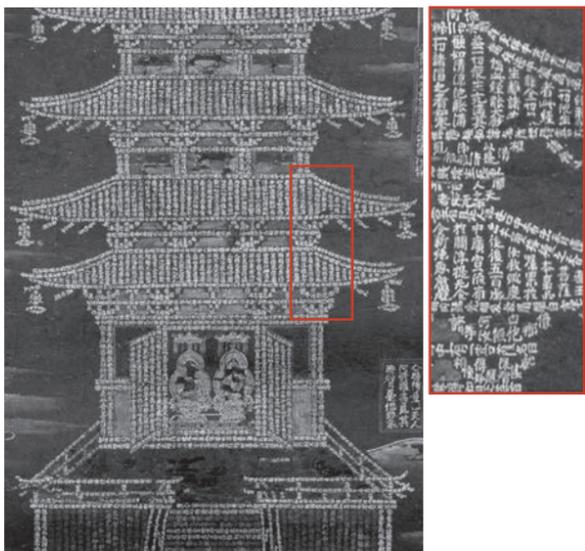


図1:禅僧沢庵の筆
禅僧である沢庵宗彭(たくあんそうほう)筆による横長扁額。「無一物(むいちもつ)」と右から横書きで書かれているように見えるが、実は一行一字の縦書きである。

文字を理解するために必要不可欠な 文字配列方向(書字方向)

縦書き、横書きのように、文字を並べ/読んでゆく方向を「文字配列方向(書字方向)」という。われわれの言語は、口や喉を使ってつくり出される音声をもちているが、この音声器官はラッパ(金管楽器)のようなしくみで音を出すため、複数の音を同時に発することができず、言語は音が時間の順に一列に並ぶというかたちをとらざるをえない。

しかし、言語はこの制約を逆手にとって、この「順序」の効果を最大限利用している。akiとkaiとikaはみな同じ音の組み合わせでできているのに、それぞれ別の意味を表しているし、文の順を逆にしても「大洪水がおきた。ダムが決壊した」と「ダムが決壊した。大洪水がおきた」では、因果関係がまったく逆になってしまう。音声言語の場合は、聞こえてくる音の順がそのままの順序になるので、聞き取ってさえいけばそれで言語として理解できるのだが、文字を読む場合は、すでに書かれて平面上にある文字を目にすることがほとんどである。

われわれのすぐれた視覚は書かれた文字を一遍に見て取ることもできるが、それでは言語として理解できない。読む人が一定の順序で文字をスキャンし、順次読み取ってゆくという積極的な行為により時間の流れをつくり出して初めて、言語の順序性が復元され、理解が可能になるのである。その読み取りの順序を伝える方法のなかで一番簡便なのが、文字をあらかじめ一列に並べておいて、読み取りの起点とそこからの進行方向とを社会的に約束しておくことなのである。これが

「文字配列方向(書字方向)」という規則である。文字・表記にとって最重要の規則だから、これを安易に変更することはできない。世界の言語がひとつの方向に固執しているのはそのためなのである。

縦書き専用だった日本語が、縦・横両用になったということがどれほど稀有なことなのか、おわかりいただけただろう。

西欧語との出会いによる さまざまな試みと葛藤

日本語が横書きできるようになったのも、日本語自身の自律的で自然な変化によるものだったわけではない。近世末期からの、左横書きする西欧語との出会いという、言語外の要因によって生じた変化だったのである。

西欧の文化・学問・技術などが学ぶに値しないものなら、この出会いも出会いだけで終わっただろうが、産業革命後の科学・技術や国民国家という国制、市民革命を経ての合理思想などは当時の日本にとって大いに学ぶべきものだったから、まず、それらの勉学の基礎となる外国語学習の場で、左横書きする外国語と縦書きする日本語をどう共存させればよいか問題になったのである。

外国語より、日本語の訳語や説明の方が多くを占める単語集のようなものでは、縦書きの日本語に合わせるため左横書きの外国語を右へ90度回転させればよかったが(29頁図3『改正増補蛮語箋』1857年刊)、本格的な対訳辞書では外国語は見出しのみならず例文などにも多くもちいられるので、むしろ外国語の方を主体としてあつかう必要がある。訳語の日本語は、狭い欄に小さな字で押し込んだり(29頁図4『波留麻和解』写本1796年成立)、左

へ90度横転させて外国語の方向に合わせたり(図5「ズーフ・ハルマ」写本(『道訳法見馬』1833年完成)、さまざまに試みが行われたが、いずれも従来の縦書きを保ったままでの工夫であり、西欧語にそろえて日本語を左横書きで書いてしまうことにはなかなか踏み切れなかった。まったく新しい文字配列方向を導入することにはそれほど大きな抵抗があったのである。

洋学者のコミュニティのなかでさきやかに使用される時期を経て、一般向けの書物に左横書きの日本語が現れるようになるのは、かなり遅れて明治になってからのことであった(図6『浅解英和辞林』1871年刊)。ここで生まれた日本語の横書きは、西欧語そのままの、見出しのような短いものも本文のような長大なものもすべて左横書きで書くというものだったが、まだこうした本格的な左横書きは、当時は、ごく限られた場で、すなわち、人でいえば、洋風の教育を受けることができた少数のエリート集団、用途でいえば、左横書きされる西欧起源の文字や記号(数式や楽譜など)とともにもちいる場合に限られて使われたにすぎない。在来の日本語の縦書きは行移りの方向も右から左へだから、左横書きの「左から」という方向性とは何の接点もない。日本語の側に、何の素地もなく受け入れる必然性もない、まったく異なるありかたが容易に受け入れられるものではなかったのは当然といえるだろう。

**庶民の好奇心が生んだ
「西欧語にはない」「右横書き」**

しかし、日本語の横書きは、西欧の左横書きに出会って、それをそのまま模倣し取り入れるというようなシンプルな道筋ばかりをたどってきたわ

けではない。

最近ではほとんど見かけなくなったが、日本語には左横書きだけでなく、右から左へ進む横書き(以下、「右横書き」とよぶ)もあった。西欧語には右横書きはないから、これはそこから取り入れたものではないし、もちろん縦書き専用時代の日本語にも存在していなかった(先に述べた日本に古くからある一行一字の縦書きと異なり、右横書きは二行以上になっても横に書かれてゆく)。アラビア語やヘブライ語は右横書きされるが、これらの言語はもちろん当時の日本語とは無関係である。

興味深いことに、この日本語の右横書きも、左横書きとほぼ同時代に、同じように西欧語の横書きとの接触によって生じたものなのである。西欧語の左横書きと日本語の縦書きとの接触は、西欧語にならった左横書きを生み出したばかりか、左横書き・縦書きどちらも似つかない第3のタイプ、右横書きを生み出していったわけである。

このいわば「鬼っ子」が生み出されたのは、言語外の要因と言語側の要因が複合して働いたからである。外部の要因というのは、鎖国時代の庶民が抱いた異国の文化への好奇心である。そうした庶民の好奇心にこたえるかたちで、エキゾティシズムが流行となり、浮世絵の世界などでは、その意匠として、遠近法をもちいた描写などと並んで、絵のなかに横文字をまねて記すことが行われたのである。

江戸時代のおわりには、外国では文字を横に書くことがあるということは庶民に至るまで広く知られていたし、すでに「横文字」ということばも存在していたのである。本来連綿しないはずの一行一字の縦書きを連綿させて西欧語の筆記体をまねてみたり、縦書きを横転させて横書きのよう

に見せかけたり(30頁図7 葛飾北斎「たかはしのふじ」1804(11年頃)、いろいろ新奇な試みが行われる

なかで、開国を機に始まった再度の異国趣味流行の時期に、日本語の文字を横に並べることが行われるようになったのである(30頁図8 歌川貞秀『聖島利迦洲 迦洲波爾波爾 出帆之図』1862年)。

しかし、当時の一般の庶民は、本格的に西欧語を学ぶ機会はなかったから、西欧語の横書きが左から書かれるものとは知るよしもない。そこで、よく見知っていて、横書きと見かけが似ている、古くからの一行一字の縦書きにならって右から左へ文字を並べ、右横書きを生み出したのであろう。これなら、初めて見る人も容易に読むことができ。右横書きを生み出したふたつの要因のうち、日本語側の要因というのは、当時広く普及していた、この一行一字の縦書きというものの存在なのである。

**「縦書き」「右横書き」併用から
さらに「左横書き」も受け入れ現代へ**

ただ、こうした新しいものの好きの流行などは長続きするものではない。その後、改めてこの右横書きが広く定着するに至ったのは、明治の新時代になり、時の政府が通貨や交通・通信など近代国家の骨格となる制度を欧米にならって導入した際、そのハード面もソフト面も丸のまま継受したことが大きく関わっている。貨幣(30頁図9 新貨条例による二十円金貨1871年)、鉄道切符(30頁図10 初期の乗車券1871年)、郵便切手(30頁図11 皇米郵便交換条約に基づく外国郵便切手1875年)などは、製造方法や大きさだけでなく、横書きの書式まで西欧式そのままに取り入れられたからである。ただ、これらの制度は国民みなが利用するものだから、エリー

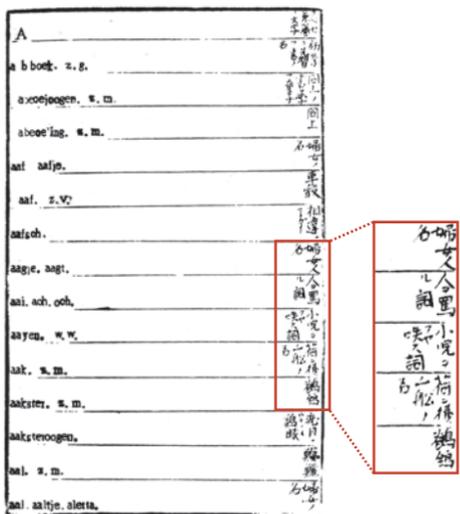


図4: 江戸時代の蘭和辞典『波留麻和解』(1796)年成
日本最初の本格的な蘭和辞典。左側のオランダ語に対し、右側の日本語の訳語は、左へ行移りする縦書きのまま小さな文字で詰め込まれている。
所蔵/東京大学総合図書館

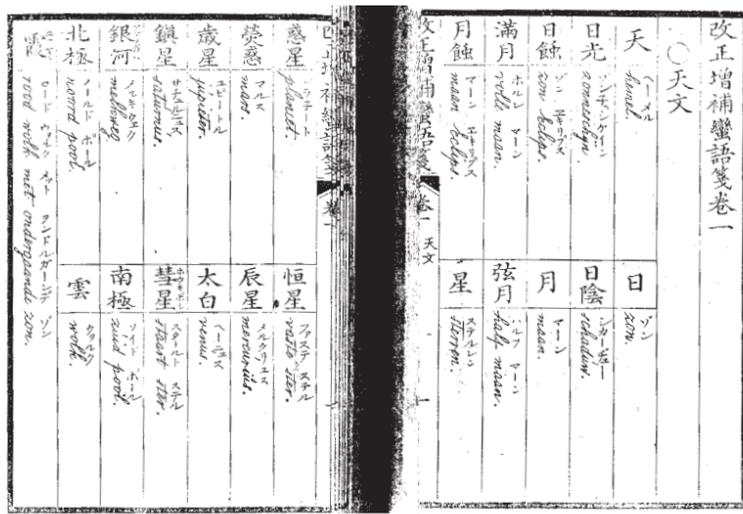


図3: 『改正増補 蛮語箋』(1857)年刊
(大阪府立大学図書館『日本蘭学英学資料』コレクションより抜粋)
江戸後期から幕末にかけて刊行された意義分類体の日本語・西洋語対訳単語集。基本となる日本語にオランダ語を対訳させているが、横書きのオランダ語を90度倒し縦にして、読み仮名を縦書きに配している。

20	ANE
Alum, s.	ミヤウバン。(クスリ)
Burat —,	ヤキミヤウバン。コハン。
Always, ad.	イツテモ。イツマテモ。シジウ。ツ子ニ。トホシ。ジヤウケツ。
Amannensis, s.	ダイヒツ。カキヤク。
Amass, v. l.	タクハベル。ダメル。
Amatrosis, s.	ソコヒ。アキメクラ。エクスヨウツガン。
Amaze, s.	オトロキ。ヒツクリ。タマゲル。ギヤウテン。
Ambler, s.	コハツ。
Ambiguous, a.	フシナル。フアンミヤウナル。ウツガハシキ。
Ambition, s.	タイモウ。ヤシン。
Ambuscade, s.	ブクヘイ。フセゼイ。
Amend, v. l.	アラタメル。ナホス。カインスル。
Amatrorhus, s.	タイヘイ。(タンナノ)
Amends, to make	ツクナフ。アガナフ。マトフ。
America, s.	アメリカ。
Amethyst, s.	シセキエイ。ムラサキスイヤウ。

図6: 最初に公刊された左横書き『浅解英和辞林』(1871)年刊
左横書きで最初に出版された語学書だが、内容的にはヘボン式ローマ字で名高いヘボン編の和英辞典『和英語林集成』などの焼き直しのようなものだった。序言を書いた内田晋齋は、当時文部省編纂寮の役人だった。
所蔵/国立国会図書館

浅解英和辞林序言	
方今英学ノ成ナル日ニ進ミ月ニ開ケ海内漸ク其学ノ繁ク可カラサルヲ知ル長時ニ當テ最高女児ト雖トモ豈コレヲ儻ノサル可クヤ然ルニ從來刊行ノ辭書或ハ漢語ヲ用ヒ字義高上ニ過クルヲ以テ初學索授ノ間往往コレヲ苦シム	
最ニ米國ヘボン先生英和辭林ノ撰アリソ	
書專ラ通俗ヲ主トシ辭條動メテ我邦ノ俗語ヲ用ヒ大ニ輕便アリ但ソノ字數多カラナルノミナラス且邦語ヲ記スルニ西字ヲ以テシカフルニ未タ譯録ノ妥當セサルモノ亦少ナラス	



図5: 江戸時代の蘭和辞典『ズーフ・ハルマ』(1833)年成
写本(『道訳法見馬』) 天保4(1833)年完成
図4の『波留麻和解』と並ぶ、江戸時代蘭和辞典の二大系統の祖となる辞書。欧語との共存をはかり登場した新しい書字方向「横転縦書き」で書かれている。
所蔵/静嘉堂文庫

